

# 「アリマス アリマセン、アレ ワ ナンデスカ」

——本邦初のハムレット第四独白訳について——

芦 津 かおり

## (序)

世界中のどの文学作品を見渡しても、「生か死か、それが問題だ」(“To be, or not to be, that is the question.”<sup>①</sup>)に始まるハムレットの第四独白ほど広く人口に膾炙した台詞はなかろう。世を憂い、逡巡を重ねるデンマーク王子の深遠な独り言。この有名な台詞が日本で初めて紹介されたとき、その訳は次のように始まった。

アリマス アリマセン、アレ ワ ナンデスカ。—  
モシ モット ダイジョウブ アタマ ナカ、イタイ アリマス

このなんとも奇妙な日本語をローマ字で表記したものが、チョンマゲに袴姿のハムレットの挿絵とともに、1874年の『ザ・ジャパン・パンチ』(*The Japan Punch*; 以下『パンチ』)<sup>②</sup>一月号に掲載された(図1参照)。世界文学の雄・ハムレットの日本デビューの瞬間である。本稿では、広く知られているとは言いがたいこの漫画記事にスポットライトを当ててみたい。第一章では、記事が掲載された『パンチ』誌の性質や執筆者を紹介した後、挿絵漫画とローマ字訳を解説する。第二章では、記事の成立事情や創作意図をめぐる二つの主要な見解—上演説と創作説—の概略を述べる。第三章では創作説を支持するべく、記事が執筆された頃の時代背景を再検証することとしたい。

## (一)

この記事が登場した『パンチ』誌は、外国人居留地・横浜に暮らす外国人の読者をもっぱらの対象として刊行された月刊漫画雑誌であった。同誌の執

Extract from the new Japanese Drama  
*Hanureta san, Danumarku no Kami,* proving  
 the plagiarisms of English literature of the 16<sup>th</sup>  
 Century



*Arimas, arimasen, are wa nan deska :-*  
*Moshi motto daijobu atama naka, itai arimas*  
*Nawa mono to ha ichiban warui takusan ichiban;*  
*Arui ude torimas muko mendo koto umi,*  
*Soshite, bobbyry itashimas o shimai? Shindarji, neru*  
*Mada; - sorekara, neru de hanashi mo yoroshi*  
*Kokoro itai to issen mainichi bonkotz*  
*Ushi otosan arimas. sore wa dekinashita mono*  
*Takusan skimashita, Shindarji; - neru; -*  
*Neru! okata nise haikin, sayo akhira skothi*  
*serampan;*  
*Kara ano shindarji no neru, nani nise haikin*  
*dekimas*  
*Kono nanpai shindarji mono jiggy skimashita,*  
*Skothi mata sinjo:*

*Vos valete, et plaudite*  
*Anata sayonara, soshite te ponpon.*

筆と発行を担当したのは、『絵入りロンドンニュース』(*The Illustrated London News*)の特派員として来浜していたイギリス人画家チャールズ・ワーグマン(Charles Wirgman: 1832-1891)。日本洋画の先駆者である高橋由一や五姓田義松に洋画の手ほどきをしたということからもワーグマンの画技のほどは窺い知れよう。みずから執筆役と発行役を一手に担った『パンチ』誌上でワーグマンは、持ち前のデッサン力をもって、辛辣でしかもユーモアのきいた時局諷刺漫画を描きつづけた。彼が主として取材したのは、横浜居留地民にとって切実な政治や外交の問題をはじめ、同居留地内の身近な人物や事件であった。そのため彼の記事は居留地の購読者にすこぶる好評を博し、『パンチ』誌は多くの号を重ねることになったという。さらに、戯画化はしていても的確に特徴をとらえた似顔絵を満載していることから、同誌は歴史資料としても重宝されている。寓意や諷刺の滑稽な漫画を意味する「パンチ」という言葉が幕末から明治初年の日本で流行しはじめたのは、他でもないこの『パンチ』誌がそもそものきっかけだった<sup>③</sup>という。

この記事が学者の注目を浴びてきたのは、不可解なローマ字訳のせいだけではなく、共に掲載されていた漫画の特異性にも拠るところが大きい。「シエクシビル」,「シバキゴヤ」と左右側面に記された舞台の上には、袴にチョンマゲ頭、二本差しといういでたちの侍。彼は右手を頬にあて、口をへの字にまげて思案顔に立ちつくしている。侍の顔は日本人風であるが、ワーグマンの他の画と比べると戯画化が少なく、かなり写実性が高いといえよう。さらに侍の頭上には「新しい日本の芝居ハムレットさん、『ダヌマルクの守』からの抜粋、16世紀イギリス文学の盗作の証拠に」(“Extract from the new Japanese Drama Hamuretu san, ‘Danumarku no Kami,’ proving the plagiarisms of English literature of the 16<sup>th</sup> Century”)という謎めいた表題が記されている。侍ハムレットの背後には、松と山と海らしき風景を描いた日本風書割があり、舞台前縁には四つのフットライトらしきものが見える。さらに舞台かぶりつきには男の後姿が認められる。

紙面の下約六割には、例のハムレット第四独白が十三行目までローマ字で書き記されている。この珍訳の成立事情などについての考察は次章以降にゆずるとして、ここではまず同訳を一行ごとに記し、各行の下には推測しうる漢字をあてはめた日本語と、シェイクスピア原文(III. i. 55-67)を並べてみる。特に難解な語については下線と数字を付して、『横浜方言演習』

4 (芦津)

(*Exercises in the Yokohama Dialect*) (第二章参照のこと；以下『方言』と略)  
④ および諸氏の解説を参考にした説明を下部に付記しておく。

Arimas, arimasen, are wa nan deska; —  
あります ありません あれわ 何ですか—  
To be, or not to be, that is the question:

Moshi motto daijobu atama naka, itai arimas  
もし もっと 大丈夫 頭 中 痛い あります  
Whether 'tis nobler in the mind to suffer

Nawa mono to ha ichiban warui takusan ichiban;  
縄もの と 刃 一番 悪い たくさん 一番  
The slings and arrows of outrageous fortune,

Arui ude torimas muko mendo koto umi,  
或い 腕 取ります 向こう 面倒 事 海  
Or to take arms against a sea of troubles,

Soshte bobbery (1) itashimas oshimai!. Shindanji (2); neru  
そして ボバリー いたします おしまい! 死んだんじ; 寝る  
And by opposing, end them. To die, to sleep —

Mada; —sorekara, neru de hanashi mo yoroshi  
まだ; —それから, 寝る で 話 もう よろし  
No more, and by a sleep to say we end

Kokoro itai to issen mainichi bonkotz (3)  
心 痛い と 一千 毎日 ボンコツ  
The heart-ache and the thousand natural shocks

Ushi (4) ototsan arimas—sore wa dekimashta mono

牛 お父っつあん あります—それ わ 出来ました もの  
That flesh is heir to; 'tis a consummation

Takusan skimashita, Shindanji;—neru;—  
沢山 好きました, 死んだんじ;—寝る;—  
Devoutly to be wish'd. To die, to sleep—

Neru! okata nise haikin(5); sayo achira skoshi serampan(6);  
寝る! 大方 贗 拝見; 左様 あちら 少し セランパン;  
To sleep, perchance to dream—ay, there's the rub,

Kara ano shindanji no neru, nani nise haikin dekimas  
から あの 死んだんじ の 寝る, 何 贗 拝見 出来ます  
For in that sleep of death what dreams may come,

Kono nangai shindanji mono piggy(7) shimashita,  
この 長い 死んだんじ もの ピギー しました  
When we have shuffled off this mortal coil,

Skoshi mate sinjo(8):  
少し 待て 進上:  
Must give us pause;

- (1) bobbery: “by opposing” の訳語で、『方言』によれば disturbance, noise 「騒ぎ, 物音」の意味。この語の起源はヒンズー語にあり, 当時のインドや中国で用いられていた (OED)。
- (2) Shindanji: “to die” の訳語で、『方言』では shin dan jee = dead とされている。
- (3) bonkotz: “shocks” の訳語であろう。『方言』には記載されていないが, 拳骨で殴る音に由来する擬態語とされる。
- (4) Ushi: “flesh” の訳語。『方言』では beef = ooshee となっているが, 肉→牛の連想からきたものと考えられる。

- (5) nise haikin : “to dream” の訳。『方言』に to see = High kin とある。夢とは実在しない贋ものを見るという意味で「贗拝見」なのであろう。
- (6) serampan : “the rub” の訳語。マレー語の sarampang の転訛であるらしい。『方言』では To break = Serampan とあり、破壊することを意味する。
- (7) piggy : “shuffled off” の訳語。『方言』には piggy の意に相当する英語として To remove, take away, Carry off, Clear the table, Get out of the road などが挙げられている。現代日本語の「ベケ」(駄目)に当たり、マレー語 pegi, pergi (駄目、止めなさい) または中国語「不可」に由来するらしい。
- (8) shinjo : 『方言』には Give = Shinjo と出ている。“give” の訳であろう。

13行のローマ字訳の下には区切りを示す印がつけられ、その下には、喜劇の終わりに役者が言うと言われるラテン語 “Vos valetе, et plaudite” (「皆様お元気で、どうぞ拍手喝采を」) とあり、さらに “Anata sayonara, soshte te ponpon.” (「あなた さよなら、そして 手 ポンポン。」) で締めくくりとなる。

## (二)

神代種亮や豊田実の紹介を経て<sup>⑤</sup>、この漫画記事の存在は広く日本人研究者の知るところとなる。その後も不可解なローマ字訳の解説作業が進められる一方で、同記事は日本『ハムレット』受容史や日本英学史の歴史的資料としても注目されてきた。しかしながら、これらの研究はいずれも、同記事の成立事情やワーグマンの創作意図にまで切り込んで解明するにはいたらなかった。いったいこの記事はどのような事情のもとに生まれたのか。実際の『ハムレット』上演を報道したものなのか、あるいはワーグマンの想像によるフィクション画なのであろうか。そしてワーグマンは『パンチ』の他の記事と同じように、諷刺を目的としていたのか。もしそうだとしたら、その諷刺の対象は何だったのか。こうした数々の問いに答えるような研究は、演劇学者・河竹登志男の登場を待つことになる。

その大著『日本のハムレット』(1972)において河竹は、ローマ字訳の解

読を試みるとともに、注意深い検証と推論のすえ本記事が「当時日本人が翻案劇として実際に横浜で上演したのを、スケッチとともに報道したもの…。その訳文はふざけたものではなく、当時の横浜方言による逐語訳である」と結論した<sup>⑥</sup>。さらに河竹は、続く「ハマ言葉とハムレット」(1973)、「独白訳と稀書『横浜方言演習』」(1974)において、1873年に居留地外国人のあいだに流布していた小冊子『横浜方言演習』と同訳との関連を明らかにしつつ、研究者たちの頭を痛め続けていた奇妙な言葉をめぐる多くの謎を氷解させたのである<sup>⑦</sup>。

『横浜方言演習』という冊子は本稿全体と深く関わることになるので、ここで簡単に紹介しておこう。幕末・明治初期にかけて居留地横浜にやってきた外国人たちは、日本の商人や車夫、女中らとコミュニケーションを図る必要に迫られて「一種の私生児的な言葉」を案出した。B. H. チェンバレン (Basil Hall Chamberlain; 1850-1935) は『日本事物誌』(*Things Japanese*) のなかでこれを「ピジン日本語」(“pidgin Japanese”)と読んでいるが<sup>⑧</sup>、「ピジン」は英語の“business”が訛ったもので、広辞苑には「植民地などで先住民との交易に使われた混成語」で「文法が単純化、語彙数が限定される傾向がある」と説明されている。イギリス出身の在日外交官アーネスト・サトウ (Ernest M. Satow; 1843-1929) もこの独特の方言に言及し、「対話者相互の社会的地位を示す日本語のはなはだしい多様性と動詞の複雑な変化がない」という特徴を指摘している<sup>⑩</sup>。横浜に生まれ、後に京都大学で教鞭をとったクラーク博士 (E.B. Clarke; 1874-1934) が「アリマセン方言」(“the Arimasen dialect”)と命名したことからも窺えるように、「アリマス」「アリマセン」を多用することもこの言語の一大特色である。たとえば英語の“to have, will have, has had, can have, to obtain, to be, to wish to be, to be at home, to arrive, to want”といった述語にはすべて“arimas” (アリマス) が適用された。

このようなピジン日本語の手引書たる『方言』は、おそらくホフマン・アトキンソン (Hoffman Atkinson) という人物が匿名で1873年に刊行し、無料で配布したといわれている。残念ながら初版は確認されておらず、1874年の再版が横浜開港資料館に一部収蔵されている<sup>⑪</sup>。再版は序文を除いて本文十数ページというきわめて薄い小冊子で、全5課分のレッスンと、英文和訳と和文英訳の練習問題が最後に付されている。下の例にあるように、同書は1

8 (芦津)

課から5課を通じて左側には英語表現、右側には対応する横浜方言を列記する方法をとる。英米人が覚えやすいように、右側の日本語欄においても日本語は一切用いず、アルファベットが一貫して用いられる(かっこ内は参考のために筆者が加えた)。

I	Watarkshee (わたくし)
He	Acheera sto (あちら人)
Hat	Caberra mono (かぶりもの)
His hat	Acheera sto caberra mono (あちら人かぶりもの)
Horse	Mar (うま)
Tea	Oh char (おちゃ)
Yes	Sigh oh (さよう)

英米人が暗記しやすいようにとの配慮であろうか、音の似た英単語を組み合わせる音訳(transliteration)の例が多いのも興味深い。

You	Oh my (おまえ)
How do you do	Ohio (おはよう)
Five	It suits (いつつ)
Theatre	She buyer (しばいや)
Hot water	Oh you (おゆ)
Good bye	Sigh oh narrow (さようなら)

限られた語彙と単純化した文法、簡略化された表現にもとづく横浜方言が意味不明瞭で難解なものであったことは、次の例文からも明白であろう。

Where are the small ones you showed my friends from England last week?	Cheese eye doko? (小さいどこ?)
Tell the laundry man to wash the clothes.	Wash boy hanashi kimono a row (ウオッシュボーイ話し着物洗う)



児玉敏子も指摘するように、会話者双方がよほどの努力と想像力を使わないかぎり、この横浜方言による意思の疎通は難しかったという。各章の例文や随所にさし挟まれる注からは、著者の多少ふざけた様子も窺える。とはいえ『方言』は、当時の居留地民には危急の問題であった日本語習熟、とりわけ横浜方言習熟のための実用書であり、今風にいえば語学の「ハウツー本」であったわけだ。

この『方言』の存在がアメリカ人学者チャールズ・B・ファーズ (Charles Burton Fahs) により河竹に知らされたことにより、『パンチ』誌の独白訳解釈は画期的な進展を遂げることになる。長く学者を悩ませていた “bobbery”, “piggy”, “shindanji” といった意味不明の語句も、『方言』をみれば、それぞれきちんと記載されているではないか。記事の出版年と同書の初版年が近接していることも考え合わせて河竹は、ワーグマンが「どうやらこの『方言』辞典と首っ引きで、苦勞して訳したらしい」と推定し、したがって「アリマス、アリマセン」は「戯訳どころか大まじめな訳とみてよさそうだ」と結論した。さらに「日本人によって片言ながら抜萃上演されたものとみる推測は、ますます正しいようにおもわれてくる」と述べて、『方言』発見前から唱えていた実上演の存在について確信をいっそう強くした。<sup>13</sup>

この河竹説の影響のせいであろうか、これ以降も『パンチ』誌の漫画記事が、実在の『ハムレット』日本語上演を報道するものであるとする傾向が強い。<sup>14</sup> ごく最近では清水勲が、本スケッチは「日本人のために催されたシェイクスピア紹介劇」であり、スケッチの下端に後姿が見えているウィリアム・ハウエル (William G. Howell) が「翻訳を担当し、公演の音頭をとった」のだらうと推測する。<sup>15</sup> ハウエル氏は、ギザギザと逆立った特徴的な髪型で『パンチ』にたびたび登場させられたが、なるほど例の漫画においても、舞台かぶりつきに認められる後姿は明らかに彼だと思われる。このように漫画記事が実際の『ハムレット』上演に基づくとする一連の研究を、本稿では便宜上まとめて上演説と呼ぶことにする。ここで指摘しておかねばならないのは、河竹にせよ、それ以外の研究者にせよ、上演説を唱えるにあたって、当時横浜に存在した劇場 (ゲーテ座、港座、岩伊座など) の資料から具体的な実上演の記録を見つけたわけではないということ。さらに、彼らは当時の新聞類に『ハムレット』上演の劇評や言及を見出だしたわけでもないということだ。つまり、上演説はあくまでも憶測の域をでないのである。

これに対して田中雅男は『『ザ・ジャパン・パンチ』とハムレットの独白』(1980)において、同漫画記事がワーグマンの想像上の産物であると主張する<sup>⑮</sup>。『パンチ』という諷刺雑誌の本質を再確認し、問題の記事を精細に吟味したうえで田中は、「『ハムレッツさん』の漫画に素材を提供したと推測されるような日本語訳による上演はいかなる形においてもなかった」こと、さらに同記事が「ワーグマン自身の創作であったこと」を結論づけている。そして、ワーグマンの創作的意図は『横浜方言演習』を含めて、当時流行していた語学書に矛先を向け「ることに他ならなかったと指摘した。

仁木久恵の「ピジン日本語のハムレット」(2001)も、同記事が諷刺であるという田中説の路線を基本的に引き継ぐ<sup>⑰</sup>。居留地における英字新聞の対立という時代背景に着目した仁木は、ワーグマンの揶揄の真の対象はピジン日本語だけではなく、それを称揚した『週刊ジャパン・メール』紙(*Japan Weekly Mail*; 以下『メール』)の主筆 W. G. ハウエル (W.G. Howell) でもあったと主張している。諷刺対象についての田中、仁木の見解には相違点もあるものの、漫画記事が実上演の報道ではなく、諷刺を目的とした創作記事であるという基本前提を両者が共有するため、前述の上演説に対して創作説と呼ぶことにする。

### (三)

第二章で紹介した上演説と創作説を比較したとき、たしかに前者の上演説のほうが話としては受け入れやすいかもしれない。過去の珍奇な上演への想像力をかきたてる魅惑的な説であることも否めない。しかしながら、その大前提となるべき実際の『ハムレット』公演に関する記録や資料が皆無であるというのは、説の信憑性をおおいに損ねるものである。さらに漫画の詳細や当時の諸状況を慎重に検討してみれば、上演説が想定する<sup>⑱</sup>ような『ハムレット』上演が現実的には不可能に近いことも明らかになる。それに対して後者の創作説はいずれも、記事執筆時の横浜居留地の文化的状況を具体的な資料や事実により浮き彫りにし、ワーグマンが諷刺を目的に創作記事を書いたと説得力をもって証明している。にもかかわらず前者が圧倒的に支持されている理由としては、先にも触れたように、河竹の著作の影響力が強大であることに拠るのではないか。そこで本章では、田中、仁木が検証した1873年頃の横浜居留地の文化的状況を、いくつかの情報を補足しながら再確認し、少数

派である創作説のための援護射撃としたい。

田中、仁木の両者が着目しているのは、『パンチ』記事掲載に先立つ1873年に横浜居留地内で日本語学習書が流行していた事実、なかでも二冊の日本語演習書が立てつづけに出版された事実である。一つはイギリス外交官かつ日本学者としても著名なアーネスト・サトウによる『会話篇—江戸口語演習二十五課』(*Kwairwa Hen, Twenty-Five Exercises in the Yedo Colloquial, for the Use of Students*)<sup>19</sup>。もう一冊は上述の『横浜方言演習』である。両者とも「演習」と銘打っていること、前者の「江戸」に後者の「横浜」が対応していることから、おそらく前者の出版を意識して、いそぎ後者が出版されたのだらうと両氏は推測する。しかし立てつづけに出版されたとはいえ上の二冊は、教授法も、到達目標とされる日本語のレベルや質もまったく異なる対照的な語学書であった。

『会話篇』は三部から成り、本文のみでも計550ページに及ぼうかという大著である。第一部では“Coming and Going”, “Buying and Selling”という具合に、さまざまな状況ごとに例文が挙げられ、そのローマ字表記と英語訳とが左右ページに対応する形で掲載される。各例文は風格を備えた日本語である。第二部では、第一部で使用された日本語が章ごとに一語一句もれなく説明される。第三部はイロハから始まるかなの手本に続いて、第一部の全例文が草書体で示される<sup>20</sup>。この構成からも、本書が知識人を対象にしたかなり高度な日本語会話の習熟を目指す本であることが窺えよう。これに対して『方言』は上述のとおり、本文わずか十数ページという薄っぺらな小冊子で、伝授される日本語も混成言語の「ピジン日本語」。その表記も日本字は避けて、ローマ字あるいは英単語を重ねた音訳で、本格的な日本語学習というより実用本位の姿勢が明らかである。『方言』の正確な出版時期や状況ははっきりしないので憶測の域をでないが、『方言』はその題名ばかりでなく、内容や形式においても『会話篇』を意識してもじったものと考えられまいか。じっさい『方言』序文<sup>21</sup>には「ごく少数の教授以外には理解できない『侍方言』(本や教授は大抵これを教えるのだが)を苦心して学ぶより、横浜で実際に使われている方言を知ることのメリットは明らかであろう」と記されている。この「侍方言」とはおそらく『会話篇』の副題にある「江戸方言」のことであろうし、『方言』の著者がおおいに『会話篇』を意識していたものと推察できる。

仁木はこれらの出版物と当時の英字新聞との関係に注目した。つまり当時の横浜居留地における二大英字新聞『ジャパン・ガゼット』(*Japan Gazette*; 以下『ガゼット』)と『メール』が、それぞれ『会話篇』と『方言』を支持して好意的な書評を掲載する一方で、他方を敵対視したと指摘した<sup>22)</sup>。つづけて仁木は次のように推論する。ワーグマンは『会話篇』の著者サトウと親交が深く、また自身も日本語にも流暢であったのだから、『方言』の推奨するようなまがい物のピジン日本語には当然ながら批判的であったはずだ。したがって、それを書評で称揚した『メール』紙の主筆ハウエルをも苦々しく思い、ピジン日本語とハウエルを諷刺する漫画記事の執筆にいたったというのだ。さらに仁木は『パンチ』誌や他資料から例を挙げて、ワーグマンとハウエルの間にライバル関係が存在したことを論証した。

しかし仁木の議論には多少の疑問が残る。というのも仁木の提示する図式一『ガゼット』紙が『会話篇』を、『メール』紙が『方言』を支持した一は必ずしも明白でないように思われるからだ。『ガゼット』紙が『会話篇』を絶賛する書評を掲載した数日前に、『メール』紙もまた同書の好意的な書評を発表している<sup>23)</sup>。つまりハウエルは必ずしもピジン日本語のみに肩入れしていたわけでもなさそうだし、ピジン日本語をめぐって二紙のあいだにさして明確な対立の構図が成立していたとも思われない。そうすると、ピジン日本語をめぐってワーグマンがハウエルをさほど恨めしく思っていたかどうか疑わしくなってくる。たしかに記事のなかにハウエルの後姿が描かれているのは事実だ。しかし劇場風景を描いたパンチ記事にたびたびハウエルが登場させられることを考えれば、清水の指摘するように「この男が芝居好きである」ためと理解してもよいのではないか<sup>24)</sup>。しかし、ここではハウエルが標的かどうかの問題はさておくとして、ワーグマンの諷刺がピジン日本語や『方言』などの語学学習書に向けられていたという田中・仁木の基本的見解にはやはり間違いがなさそうであることを確認しておきたい。

ここで注目すべき一つの出来事を紹介しよう。『会話篇』の書評が英字新聞紙上にぎわしていたほんの十数日ほど前(10月9日)のこと、日本アジア協会大会において、英国国教会の宣教師 J. Edkins が“The Nature of the Japanese Language, and Its Possible Improvement”と題する講演をおこない、その内容が10月11日の『メール』紙に掲載された。ここでエドキンスは日本語文法の「不自然」さを指摘し、その「改良」を提唱する。1500年前

に中国語がもたらされた時、日本人は中国語の語句を輸入するに留まったため、文法を改良する好機を失ったのだと講演者は嘆く。そして文部省が英語教育の導入を企てている今こそ、英語の概念・語句のみならず語順も日本語に導入しようと提案するのだ。日本人の手に任せればきっと「日本語の語順は依然として保持され、語彙に大量の新語が加えられるであろう」と彼は危惧するが、なるほど「クリアーなコンセプトをエスタブリッシュする」といった奇妙な日本語表現が氾濫する現状を考えると、あながちエドキンスに先見の明がなかったとは言えない。

多くの日本語の統語的「欠点」のなかでも、とりわけ動詞の位置はゆゆしき問題とされた。「人間精神がかくも不便な法則の支配に甘んじているとは、知的劣等を決定的に示す証拠だ」とエドキンスは憤る。講演終盤に彼は六つの具体的改良点を提案するが、たとえば、英語の動詞位置に準じて「来たジョン・ザ・バプティストが 説教しながらユダヤの荒野で」と言えるための訓練が推奨される。また、日本語に英語の前置詞を導入し、日本語の後置詞との併用を目指すべきだともいう。「部屋のなかで」とも「イン部屋」とも言えるようになれということであろう。これは日本語文法の規則には反するけれども「自然のおきて」(“the law of nature”)に従っているから構わないらしい。言語平等説など信じないエドキンスは「優れた文学は、貧困な言語からは生まれ得ない」と確信し、それゆえ欧州最良の言語である英語、フランス語、ドイツ語が、欧州文学の最高峰をなすとする。だから、彼の提案に従って日本語を「豊かに」にすることは、貧困なる日本言語のみならず貧困なる日本文学をも救い、日本の知的進歩を助けてやることなのであって、「数百の蒸気船や数千マイル鉄道よりも国民にとって価値のあることだ」と力説した。

この講演はひどい不評をこうむり「めったざりにされた」と『メール』紙は報道するとともに、言語の変更は「一部の教養人や将来を見通せる紳士たちが、書齋で意のままに片付けられること」ではないと批判した<sup>25</sup>。しかし興味深いことに約一月後の『メール』紙は、同講演への「反応」として「匿名の改革者」から『方言』が送られてきたことを発表している。具体的にどんな方法で『方言』が送付され、そこに添状があったかどうかなどについては言及されていないが、『メール』紙は『方言』がエドキンスの提案にある程度基づいて作られたものだと判断し、近く『方言』の書評を掲載すると約束

している<sup>27)</sup>。そして実際に同書は、一週間後の11月22日に同紙上で好意的な書評を得た。

エドキンスの日本語改良案と『方言』の伝授するピジン日本語のあいだに具体的な共通点はあまり見出せない。ただし両者に共通しているのは、本来の正しい日本語などは二の次にして、ともかく英語と混成してしまおうという实用優先の態度であろう。「エドキンス案を実施するくらいなら横浜のピジン日本語を使ったらよかろう」というサトウの皮肉なコメント<sup>28)</sup>は、この点で両者の本質を鋭く見抜くものである。『方言』がエドキンス案に通じるものであるという『メール』紙の判断も、その意味においては妥当なものといえる。

上の講演エピソードの紹介を通じて強調したかったのは、ワーグマンの記事が出る直前の横浜居留地において、日本語および日本語学習の話題が、講演記録や書評といった形で何度も英字新聞に現れているという事実である。これは居留地外国人の、日本語や日本語学習に対する意識や関心の顕著な高まりを表わすものであろう。英語至上主義的な立場から日本語改良を企てたエドキンス、日本語を一体系として尊重し、その本格的伝授をめざしたアーネスト・サトウ、実際の交流現場から生まれたピジン日本語を書き記したアトキンソン。信条こそ違うものの上の三者は、日本語という「外国語」に積極的に向き合い、その異質性を認識し、それを克服しようと試みた点において共通しているといえる。たしかに1873年以前にも外国人向けの日本語会話の本はすでに存在していた。しかし、エドキンスの講演、二冊の日本語学習書の出版、およびその書評掲載といった1873年秋の一連の出来事は、居留地外国人が従来から抱いてきた日本語およびその習得への関心や問題意識の高揚を如実に映し出すものであろう。

横浜居留地の日常関心事に取材しつづけたワーグマンが、こうした動きを見逃すはずはない。そして、おそらく直接的には『方言』出版に刺激されて漫画記事の創作を思いついたのではなかろうか。その際、ピジン日本語の代表語“arimasu”に相当する英語“to be”を冒頭にかかげるハムレットの独白——そのうえ、英文学上ですばぬけて有名な台詞である——がワーグマンの念頭に浮かんだことには容易に合点<sup>29)</sup>がいく。ワーグマンは、『方言』に従えば沙翁の名文句がなんとも「詩的」な日本語に様がわりさせられるかを面白おかしく描き、それと同時に、居留地民があれやこれやの方法で日本語と格闘

している様子をも笑ったのであろう。そう考えると、侍姿のハムレットがしかめっ面で難解な独白を語る姿は、西洋化をめざす日本人のむなしい努力を揶揄する<sup>⑩</sup>とともに、奇妙な横浜方言を学習したり、現実ばなれした日本語改良案を大真面目に唱えたりする外国人への皮肉いっばいのメッセージとも受け取れそうだ。つまるところ、異文化や異言語とは日本人だけの課題ではなく、居留地の外国人にとっても身近で危急の問題だったのだ。

これより数年後、1879年7月にロンドンの『ザ・ニュー・クォーターリー・マガジン』(*The New Quarterly Magazine*)が横浜方言の存在を報じる記事“A New Dialect; Or, Yokohama Pidgin”を發表し、それを『ジャパン・ガゼット』紙が転載した。その記事は横浜方言の滑稽な表現を紹介しながら次のように語る。

これ(横浜方言)は実のところ、このうえなく愉快なおふざけだ。しかし、ピジンや同種の表現方法は、俗語とも混成語(*lingua franca*)ともつかぬ立場にあるため、言語学者にはまったく相手にされず、死に絶えてしまうかもしれない。だれか親切なユーモリストが、その風変わりな泣き声に心惹かれて、これらの私生児言語たちを暗く卑しい道端から拾いあげ、雑誌やパンフレットといった、貧しき者の豪華な避難所に担ぎ込んでやらないかぎり<sup>⑪</sup>は。

まさにワーグマンこそ、ここに描かれている「ユーモリスト」の典型だといえよう。彼はほんの一枚の紙面に横浜方言の醍醐味を、当時の横浜居留地民の生活ぶりや関心事をもふまえてユーモアたっぷりに描きこみ、言語学、明治史、日本英学史、日本シェイクスピア受容史などの諸分野にとって貴重な資料を残してくれたのである。

#### 註

- ① William Shakespeare, *Hamlet*, III. i. 55-87. なお *Hamlet* からの引用は *The Riverside Shakespeare*, ed. G. Blakemore Evans et al. (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974) による。
- ② 復刻版 *The Japan Punch*, 雄松堂, 1975年。
- ③ 清水勲『ワーグマン日本素描集』岩波文庫, 1987年, 172。
- ④ *Exercises in the Yokohama Dialect*, 2nd ed., Yokohama, 1874.

- ⑤ 神代種亮「ハムレット獨白の日本譯」『明治文化』第一号 (1927), 4-6; 神代「Hamlet の Monologue の最初の日本譯」『英語と英文學』(1928), 327-329。豊田実「日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史」『文学研究』第一輯 (1932), 123-52。
- ⑥ 河竹登志男『日本のハムレット』南窓社, 1972, 484。
- ⑦ 河竹登志男「ハマ言葉とハムレット」『學燈』第七十卷第五号 (1973), 4-7。河竹「独白訳と稀書『横浜方言演習』」(1974)。
- ⑧ アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』上, 岩波文庫, 1960年, 21。
- ⑨ B. H. チェンバレン著・高梨健吉訳『日本事物誌』2, 平凡社, 1969年, 141-42。
- ⑩ サトウ, 前掲書, 21。
- ⑪ 『横浜方言演習』の出版事情は複雑であり, 出版年代や著者についても不明の点が多いが, 本稿には直接関与しないので詳述しない。児玉敏子「*Exercises in the Yokohama Dialect* 再考」『英学史研究』第32号 (1999), 1-11を参照のこと。
- ⑫ 児玉, 前掲論文, 3。
- ⑬ 河竹「ハマ言葉とハムレット」, 4-7。
- ⑭ たとえば鳥居民『横浜山手』(草思社, 1977年)や Yasunari Takahashi, “*Hamlet and the Anxiety of Modern Japan*”(Shakespeare Survey 48)を参照のこと。杉浦日向子『東のエデン』(ちくま文庫, 1993年)は実在の『ハムレット』上演があったという設定の漫画である。むろん漫画と学術研究は同等に扱うべきではないが, この杉浦漫画の存在は, 河竹説がどれだけ浸透しているかを示す証左となる。
- ⑮ 清水勲「補注」『ワーグマン素描コレクション』上, 岩波書店, 2002年, 125。
- ⑯ 田中雅夫「『ザ・ジャパン・パンチ』とハムレットの独白」『近代』55 (1980), 41-72。
- ⑰ 仁木久恵「ピジン日本語のハムレット」『漱石の留学とハムレット』, リーベル出版, 2001年, 230-58。
- ⑱ とりわけ仁木論文の「上演説への疑問」(243-37)はこの点を徹底的に論証する。
- ⑲ Ernest M. Satow, *Kuairwa Hen, Twenty-Five Exercises in the Yedo Colloquial, for the Use of Students*, Yokohama, 1873. *Collected Works of Earnest Mason Satow, Part 1: Major Works Vol. 1*, Bristol : Ganesha, Tokyo: Synapse, 1998.
- ⑳ 『会話篇』に関しては, 前大谷大学助手・北城伸子氏より色々のご教示いただいた。記して深謝申し上げます。
- ㉑ 第二版によるが, 初版につけられていたはずの序文である。
- ㉒ *The Japan Gazette, Mail Summary and Shipping and Market Report*, October 21, 1873. *The Japan Weekly Mail*, November 22, 1873.



- ②③ *The Japan Weekly Mail*, October 18, 1873.
- ②④ 清水勲「補注」, 125。
- ②⑤ 元にある英語は “In those days came John the Baptist preaching in the wilderness of Judea.”
- ②⑥ *The Japan Weekly Mail*, October 11, 1873.
- ②⑦ *The Japan Weekly Mail*, November 15, 1873.
- ②⑧ *The Japan Weekly Mail*, November 15, 1873.
- ②⑨ ワーグマンがシェイクスピア作品へ向かったことには、『方言』の練習問題も関与している可能性がある。同書最終部には英文和訳と和文英訳の練習問題があるが、そこにはシェイクスピアの *Richard III* から、死を目前にしたりチャード三世の壮絶な叫びらしき横浜方言 “Ginrick-pshaw motty koy — ginrick-pshaw arimasen, mar motte koe! Mar sick sick, betto druncky druncky. Coora serampan. Oh my piggy jiggy jig, watarkshee pumgutz sinjo arimas” (人力車 持ってこい。人力車 ありません。馬持ってこえ。馬 シックシック 別当ドランキードランキー。こら セランパン。お前ベケ 直々 私ボンコツ 進上 あります) を英訳する課題が与えられているのだ。
- ③⑩ 高橋康成は前掲論文(註⑭)において、困難をかかえた日本近代化過程の縮図をパンチ記事のなかに読み取っている。
- ③⑪ *The Japan Gazette*, November 1, 1879.

(本学専任講師 英米文学)